

平成26年10月7日

番号：5 氏名：大竹幸一郎

テーマ：①全国の人に伝えたい、前橋の歴史・文化

未来志向の街、前橋へようこそ。

前橋は繭と生糸の街です。前橋という地名は、もしかすると「繭橋 (mayubashi)」からだったかもしれません。文献には「厩橋 (mayabashi)」として初出しますが、利根川の水運の北限の集積地として厩が多かったことからだとも言われます。後にヤがヤ行のエに変わって「mayebashi」となったものです。17世紀初めに刊行されたキリシタン文献によると、50音図のア行、ヤ行、ワ行のエは全て「ye」と書かれています。「エビスビール」がYebisu Beerなのも同類です。

ついでながら、「群馬」は「クルマ」からの変化と言われます。県民一人当たりの自動車の所有台数が全国一なのも関係あるかしら？昭和の大合併で前橋市に合併した旧群馬郡の総社町、元総社町には、奈良時代に上野国の国府や国分僧寺、国分尼寺がおかれていて、東国文化の中心地であり、利根川の水運の拠点でもありました。そこには東国最古の寺である山王廃寺跡があります。馬車や牛車などが行き交い、当然のこととして厩も多かったことでしょう。繭橋はこじつけですが、群馬と厩橋は偶然の馬関連の地名です。

そもそも群馬県は、岩宿遺跡という後期旧石器時代の遺跡が日本で初めて発見された地です。古代遺跡は県内各地に多く分布していて、ここ前橋にも考古学的に知られた遺跡が数多くあります。上武国道の建設に伴う調査では、芳賀地区という極めて限られた地域に、縄文草創期から鎌倉時代に至る住居跡が発掘されました。また遺跡の400メートルほど南の鎌倉坂の下には、古利根の船着き場があったと伝えられています。また群馬県は古墳が関東で最も多いことでも有名で、前橋には主なものに大室古墳群や総社町の二子山や蛇穴山古墳などがあります。蛇穴山古墳は幸いにして内部に入ることができますので、羨道や石棺に直に触れて、古代へ思いを馳せてみてください。

戦国時代の前橋城は、甲斐の武田氏、相模の北条氏、越後の長尾氏（上杉氏）の争奪の対象でした。日本百名城の一つである箕輪城の長野氏は有原業平の末と伝えられ、文武に秀でた武将でしたが、落城の憂き目に遭いました。その家臣の上泉伊勢守は、前橋市上泉町に居城を構える武将で、伝承によっては大胡武蔵守、大胡伊勢守とも記されます。箕輪城の落城後武田家からの仕官の要請を断って、剣の道を広めるための諸国行脚に出ました。上泉伊勢守の創出した剣の流儀が新陰流です。伊勢守は「袋竹刀」という木剣に代わる稽古用具を発明し、新陰流の合理的な術理と相まって優れた後継者を数多く排出しました。有名な柳生新陰流もその一つです。

江戸時代の前橋は、暴れ川で坂東太郎と呼ばれる利根川の氾濫のために、苦勞が絶えなかったと伝えられます。利根川の流れの変化によって前橋城は何度も被害を受け、城の修復や川の流れを変える工事を繰り返しました。しかし明和4年（1767年）、城主松平朝矩はついに前橋城を放棄して川越に移り、城は取り壊されました。その後百年間というもの前橋には陣屋がおかれ、町は寂れていきました。一方利根川西の総社地区では、「雲にはしごを架けるようなもの」と言われるほどの難工事にもかかわらず、知行高僅か6千石の領主秋元長朝の並々ならぬ努力によって、慶長9年（1604年）に天狗岩用水が築かれました。秋元家は次の代に甲州谷村（現在の山梨県都留市）に国替えになって総社を去りましたが、用水完成からから172年も後の安永5年（1776年）、農民が秋元氏の創建した光厳寺に「力田遺愛碑」と呼ばれる碑を建てて、その偉業を讃えています。領民が旧領主の業績をたたえる碑を建てるなどということは、他所には例が無いでしょう。今なお総社では「秋元様」と慕われ、天狗岩用水は今も田畑を潤しています。

江戸末期になると、前橋の街の様子が一変します。安政6年（1859年）に横浜が開港すると、それにもなつて生糸貿易で活況を呈するようになったのです。そこで力をつけた町人たちが立ち上がりました。城

を築いて殿様を前橋に呼び戻そうと。これは大変な大事業です。しかも築城しようというのは函館の五稜郭に比せられるような城郭です。それにもかかわらず成し遂げたんですよ、前橋の先輩たちは。慶応3年（1867年）には再築が成り、百年ぶりに城主を迎えることができました。武士と町人が一致団結したからこそこの成果です。残念なことに翌年に明治維新となり、明治4年（1871年）に廃藩置県となりました。

町民に応えるように、前橋藩は明治3年（1870年）6月下旬、藩営の前橋製糸所を作って操業を始めます。これは日本初の機械製糸所です。国が主体となって作った官営の富岡製糸場に2年も先駆けています！しかも松平大和守家は「引越し大名」とあだ名されるほど国替えが多く、国替えの都度の莫大な出費で財政的に破綻していました。前橋製糸所は、前橋藩とともに歩んだ前橋の町民の未来志向の現れです。一方埼玉県深谷出身の渋沢栄一は、前橋製糸所に刺激を受けて、国に製糸場建設を働きかけました。渋沢の義兄にして師でもある尾高惇忠が創立責任者となって始まったのが、富岡製糸場です。尾高は富岡製糸場の初代場長となり、その娘ゆうは、富岡製糸場の工女第1号として知られています。

藩営前橋製糸所、いえ日本中の機械製糸場を語るうえで忘れてはならない人物こそ、下級藩士から身を起こした速水堅曹です。明治3年5月速水堅曹は前橋藩の生糸取締役に任命され、同年6月スイス人教師ミュラーを雇入れ、僅かな期間で機械製糸の技術を習得しました。たぶん彼の生家が内職として坐繰りを行っていたであろうし、知識ばかりでなく技術的にも熟達していたからであろうと推察されます。前橋製糸所には全国から見学者や伝習生が訪れ、彼は惜しまず技術を伝授しました。そればかりか、全国各地を巡って製糸場の指導をしています。後に彼は富岡製糸場の場長にもなり、製糸業の先達としての功績によって正五位に叙せられました。日本の産業発展の恩人として、忘れては成らない偉大な先達です。ちなみに彼の『六十五年記』の記述から、製糸場の労働環境は女工哀史などに描かれるような悲惨なものではなく、明朗で健康的であったことが知られます。

鉄道は多くの場合、河川や海岸線に沿って布設されました。ところが群馬県と栃木県を結ぶJR両毛線は、平地を蛇行しているのです。わざわざ遠回りをして一見効率が悪いようですが、主な駅は、染色の高崎、生糸の前橋、銘仙の伊勢崎、機織りの桐生と、全て生糸関連の地域です。集荷と輸送という点では、効率的です。生糸関連産業には線路を蛇行させるほどの影響力があったのでしょうか。

昭和20年（1945年）8月5日、午後8時半頃からのアメリカ空軍の大空襲により、前橋は当時の市街の約8割を焼失しました。広島に原爆が投下される前日です。飛来したB29重爆撃機は92機、これが投下した爆弾は、M-69ナパーム焼夷弾131,290発、500ポンド破片取束弾88発、500ポンド通常爆弾62発という凄まじさです。死者は公式には535名とされていますが、避難先で機銃掃射などで死んだ人を含めるとさらに増えるでしょう。私事ですが、私は焼夷弾の不発弾で大やけどを負いました。終戦後鉄材を確保するために集められていた焼夷弾を悪戯していたところ、信管が爆発したのです。運良くナパームは既に燃え尽きていて、残っていたのが信管だけだったので、命拾いしました。国民学校（小学校）3年生の秋のことでした。

戦災からの前橋市街の復興は大変に早く、同じように空襲を受けた他の地域の模範とされました。しかしながら、綿密な再建計画や都市計画の行なわれない復興でしたから、却ってその後の発展を妨げることとなりました。現在の前橋の中心部の道路が狭く、分かりにくいと言われるのは、復興の早さが原因です。今後の再開発には、早さよりも将来を見据えた慎重さが求められます。私見ですが、来る東京オリンピックでも箱物造りは慎重であるべきだと考えています。

前橋に来られての第一印象はいかがでしたか？もしかして駅に降りた瞬間、寂れた街だとお感じになりましたか？それとも静かで落ち着いた街だとお感じになりましたか？私はこの落ち着きを大切にしたいと考えています。知っていただきたいのは、古い城や建物でも、新しく作られたものでもありません。城を築いて殿様を呼び戻したり、枯渇した財政の中で機械製糸所を興して品質を向上させ、日本の産業の礎を築いたり、戦後の荒廃からいち早く復興を遂げたりした、前橋の先人たちの未来志向の精神と行動力です。